

2021年

8月第1・2週の礼拝説教要約

・ 8月1日：マルコ福音書6:34-44

「人を養う神」

・ 8月8日：マルコ福音書6:45-56

「神の多忙」

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

私は全地の面にある、種をつけるあらゆる草と、種をつけて実がなるあらゆる木を、あなたがたに与えた。それはあなたがたの食物となる。(聖書協会共同訳 創世記 1:29.)

天地の造り主は、原初、万物を創造するにあたり、人類には草食の習慣を守らせようとしていました。たしかに人が、草食のみにて生きることが可能なのは既に実証済みです。その結果が長寿になるのか、短命に終わるのかは、未だ意見が分かれています。

聖書の民はヘブライ(=ベドウィン)と呼ばれた遊牧民族の出であることが創世記に記されています。メソポタミアのカルデアのウルからアブラム(のちのアブラハム)が脱出した時、彼らは草食のみに生きることが事実上不可能となり、羊と共に生きる身となります。そんな先祖のイメージと羊飼いである神のイメージは、容易に結びつくものとなりました。

エデンの園での永住権を失った人類の中から、主なる神は信仰へと導くために義人のノアを、また、その子孫のアブラハムを選び出します。さらにその子孫のために約束の地を与えてそこに住まわせ、額に汗して穀物を得させ、彼らには再び草食の機会が与えられました。

ただ、古代社会では穀物の安定供給は儘なりません。冷夏などのささいな気候変動でも、たちまち飢饉で苦しめられてしまいます。イエスの後を追ったとされる数千人もの人々とは、まさに飢饉の食糧難のために思い煩う人々だったと考えられます。

イエスは別のところで、野の花や空の鳥を養う天の父なる神のことを人々に教えていますが、今度は、その神の独り子の出番でしょうか。原典通りに翻訳すると、キリストは、あたかも、その場所に(ぶどうの苗木を等間隔に栽培するかの如く)規則正しく人々を座らせ、彼らに養分を与えるように食物を分配したのです。この時、主は羊飼いのようではなく、農夫のように、人々を養ったのです。弟子たちの手を借りて。この形式が、「空の鳥よりも、野の花よりも優れた人間」に相対する時の手段として用いられました。その光景は、宗教改革を経たプロテスタント教会における聖餐式の時の配餐方法と酷似しています。神の招きに与る人々は時を超えても、何かよく似た体験をするものなのかもしれません。

さて、イエスと弟子たちの現在地は、ガリラヤ湖の最北端で、北方から流れこむ川の河口の西岸にいます。その河口の向こう岸(東岸)にはベツ

サイダという漁村があり、イエスは弟子たちに舟で向こう岸に渡るように命じ、彼らは一足先に離岸します。一人のこされたイエスはなんとか多くの人々を家路につかせました。

一方、弟子たちの舟はというと、目と鼻の先の、河口の東岸にたどり着くことができません。原因は、川上から吹き下ろす北風のせいです。舟は何時間もの間、どんどん南下してしまい、気が付くと彼らは湖の中央付近まで押し流されていたようです。現代とは違い、携帯電話はありません。磁石もコンパスもない時代、闇夜で岸辺の風景も目視不能です。この状態は、コロナのために身動きがとれない現代の私たちの日常ともよく似ています。イエスと弟子たちは陸と湖で離れ離れとなってしまいます。弟子たちはもう朝が来るのを待つしかありません。やがて、うっすらと東岸の地形らしきものが目にとまる夜明け前のことでした。彼らの舟の方へと向かってくる人影が見えます、少しずつ距離が縮まってきています、「(何だあれは・・・?)」。眠い目をこすりながら、弟子たちは一人また一人と、その異常な光景を目撃します、「うわあ〜!、ゆ幽霊だ〜!!!」とまあ、小心者の彼らは慌てふためいたのでした。その人影が、危うく彼らの舟の横を通り過ぎようとしたとき、重い口を開きます、「勇気を出せ、私だ。怖がるな」。その時、舟を押し流していた強風は、なぜか静まりました。

失われていた人間同志の再会には、来たるべき復活後のイエスと弟子たちとのあの劇的な再会に匹敵する驚きがありました。

さて、朝が来て、通常ならばイエスは舟でカファルナウムに、ひとまず戻って、休息をとるべき時です。弟子たちも、同様に休みをとらなければ身が持ちません。ところがイエスは自宅ではなく、その遙か南のガリラヤ湖西岸のゲネサレトへと向かいました。目的は、その町の病人を癒すためです。日が昇り、イエスの到着は、たちまち町中に知れ渡りました。

神の独り子は、ここでも多忙を極めます。共に岸に着いた弟子たちがこの時、どこで何をしていたのか、イエスの手伝いをしたのか、それとも帰宅してしまったのか、マルコ福音書の記者は沈黙を守ります。もしかしたら弟子たちの疲労にも配慮していたのかもしれませんが。彼らにとってイエス・キリストの軛を負うことは、並大抵のことではありません。湖上にあった時も、彼らは無防備のままでした。けれども主イエスはけっして彼らを放置したままにはしませんでした。コロナ禍にあって、ワクチン接種が2回終わった人ならば、今負うことのできるキリストの軛がどこかにありそうです。それを見出だす人は幸いなのかもしれません。